

# 東京大手町で神奈川県産『春の七草』をPR ～三浦七草会～

生命力のある若菜を食べて、一年の無病息災を祈願する「七草粥」の伝統行事を次世代へ伝えようと、1月7日、農業・農村ギャラリー「旬」（東京都大手町）では、来館者に七草粥 400 食を振る舞った。

山形県産米「はえぬき」使用のお粥に、神奈川県三浦半島産の「春の七草」（ナズナ、ホトケノザ、ゴギョウ、セリ、スズナ、スズシロ、ハコベ）をたっぷり入れ、薄い塩味で仕上げた七草粥約 400 食は、開始と同時に長い列ができた。

使用された七草は、「三浦七草会」が生産販売した「春の七草」セット。「三浦七草会」では、三浦市と横須賀市の生産者 5 人で、昭和 63 年から七草パックを作っている。注文数は年々増加傾向にあり、今年度は元旦から 5 日を中心とする年末年始で約 140 万パックを出荷。消費地に近い物流面の利便性を生かし、首都圏を中心に北海道から関西まで、市場や量販店などの契約先へ販売した。代表の岩崎重夫さんは、「今年は、温暖といわれる三浦半島でも経験した事のないような暖冬で、七草の栽培管理には非常に苦労した。緑の葉が豊かな軟弱野菜は黄変（おうへん）が出ると、見た目が悪く商品価値がなくなる。ボリューム感ある緑の葉が多いほど黄変のリスクが高まる。出荷前は冷蔵庫に入れて温度管理しても、気温が高いと配送中に黄変する可能性もある。『今年は葉のボリュームを抑えて』という取引先の要望にあわせ、七草のわき芽をつみ、中心の新芽だけ残して育てる調整作業を行った」と話していた。

七草粥を手にした女性は、「七草を家庭で揃えるのは難しいのでパック販売は便利。日本の伝統行事が廃れていかないよう、今後も続けて欲しい。」と笑顔を見せた。

農業・農村ギャラリーでは、家庭でも七草の行事を楽しんでもらおうと「春の七草パック（1 パック 600 円）」を 5 日から 7 日まで販売した。同ギャラリー川並マネージャーは「今年は取材も多く、春の七草パックも大変好評で、追加で入荷した分も売り切れ間近だ。来年も開催したい。」と話している。



農業・農村ギャラリー職員が、来場者先着 400 名に「七草粥」を振る舞った



無病息災を願う「七草粥」を求め、長い列が出来た